

ワディ・ブルマ、カイト・サイト1 採集の クレイパイプについて

廣田典之

A Note on the Clay Pipe from Wadi Burma Kite-Site1, Southern Jordan

Noriyuki HIROTA

ジャフル盆地先史遺跡調査計画の2003年度調査において、ワディ・ブルマ、カイト・サイト1 (WB-KS1) からオスマン朝のクレイパイプが1点表面採集された (CP-1)。本稿の目的は、1) これまでの編年研究に基づき CP-1 の年代を明らかにすること、2) その年代を基に WB-KS1 の再利用時期を特定すること、の2つである。従来の編年研究と照らし合わせると、CP-1 の年代は18世紀前半と推定できる。従って、WB-KS1 の再利用時期はこれと同時期、つまりオスマン朝支配時期の中盤と考えられる。

キーワード：クレイパイプ、ワディ・ブルマ、カイト・サイト、オスマン朝、ヨルダン南部

This brief note discusses the chronology of the clay pipe found at Wadi Burma Kite-site1 in southern Jordan during the 2003 excavation season of the Jafr Basin Prehistoric Project. The present chronological framework suggests that this pipe can be dated to the first half of the 18th century. The date is probably related to the reuse of WB-KS1, which was constructed during the Umayyad period.

Key-words: clay pipe, Wadi Burma, Kite-site, Ottoman period, Southern Jordan

はじめに

金沢大学の藤井純夫氏は、「ジャフル盆地先史遺跡調査計画 (JBPP: the Jafr Basin Prehistoric Project)」第2期調査の一環として、2003年春にワディ・ブルマ、カイト・サイト1 (Wadi Burma Kite-site1、以下 WB-KS1) の発掘調査を行った。この調査において、土製の喫煙用パイプ (クレイパイプ clay pipe) が1点表面採集されている¹⁾ (Fujii 2004; 藤井 2004: 25) (図1, 2)。本稿の目的は、これまでの編年研究に基づき、WB-KS1 採集のクレイパイプの年代を明らかにすることである。また、その結果より推定される遺構との対応、とりわけ WB-KS1 における再利用の時期について、試論を提示したい。

資料紹介

WB-KS1 採集のクレイパイプ (CP-1) について、特徴を記述する。

本資料は、火皿の上部、および底部が欠損している。底部の欠損は意図的に穿孔されたものと考えられ、火皿の内部には何らかのものをねじった痕跡が認められる。胎土は暗灰色で、表面全体に赤色の化粧土が施されている。また、軸の下部は黒く変色している。火皿・軸ともに表面は磨か



図1 WB-KS1 採集のクレイパイプ

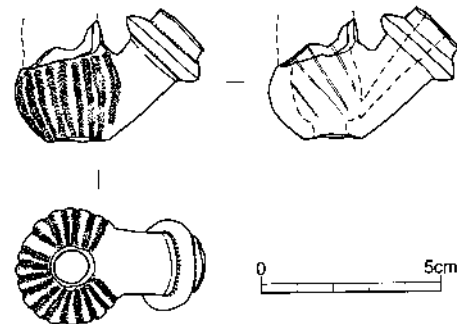


図2 CP-1 実測図 (S = 1/2)

れており、光沢がある。クレイパイプには軸や火皿にスタンプ文様が施されたものがあるが、CP-1には認められない。火皿の形状は基本的に丸いが、側面に縦方向の回転押型文が施されているため、凹凸がある。火皿底部と軸との継ぎ目はなくフラットであり、竜骨（キール）状にはなっていない。そして、軸の先端付近には分厚いリング状の装飾が施されており、この部分と軸の結合部の両側にも、回転押型文が施されている。なお、柄を差し込む軸孔の直径は、0.8 cmである。

年代

オスマン朝のクレイパイプに関する編年研究をまとめ、各編年案における基準において、有効であると考えられる基準を用いて時期区分を設定し、今回採集した資料の年代を考察する。

1. オスマン朝におけるクレイパイプの編年研究

クレイパイプによる喫煙が西アジアに伝えられたのは、16世紀末のオスマン朝時代であるとされている (Robinson 1983: 266; 曾我 1933: 242)。クレイパイプは、オスマン帝国領内であった各地域の発掘調査において出土しており、これまでに3人の研究者によって編年案が提示されている (表1)。

これらの編年案は、主に各遺跡からの出土資料により組まれているが、遺物の出土層位が明確で、共伴遺物から年代を推定しているのはハイエス (Hayes, J. W.) の研究である。ハイエスはサラチハネ (Saraçhane) から出土したおよそ1000点以上のクレイパイプに加えて、アンカラの博物館に展示されている伝世品、そしてコジャバシュ (Kocabaş) の手記による、イスタンブールにおけるクレイパイプの変遷 (Hayes 1980: 4) を用いて編年案を組んでいる (Hayes 1980, 1992)。

他の編年案においては、出土層位が明確なクレイパイプはごく僅かであり、基本的にハイエスの編年案を踏まえている。それに加えて、ロビンソン (Robinson, R. C. W.) は18, 19世紀にレヴァント地域を旅した人々によって描かれた、型式分類可能な絵画資料や、ブルガリアにおける出土資料を利用して編年案を組んでおり (Robinson 1983, 1985)、St J. シンプソン (Simpson) はレヴァント地域およびブルガリアにおける出土資料との比較検討を行っている (Simpson 2002)。

なお、これらの遺物は全て廃棄資料であり、製作地については文献史料の記述によっている²⁾。

2. 編年基準

ハイエスは編年の基準として胎土色、外面の色(化粧土)³⁾、

光沢の有無、スタンプ文様の有無、火皿の厚さ、の5つを用いて、5時期に大別している (Hayes 1992: 393-94)。これらの基準はコジャバシュの記述を基にしており、出土資料の様相もほぼ一致している。故に、これらの基準はCP-1の年代推定において有効であると考えられる。しかし、光沢に関しては風化による影響も考えられ、ギリシアの事例においても、光沢がみられるようになるという18世紀以降のクレイパイプで、光沢のみられないものが少なからず存在している。また、火皿の厚さについても、明確な基準は提示されていない。よって、本稿ではこの2つの基準は扱わないこととする。

ロビンソンは胎土色、化粧土の有無、火皿底部と軸との継ぎ目、軸孔の直径、スタンプ文様の有無、火皿の形状、の6つを基準としており、それぞれの基準における画期を指摘している (Robinson 1985: 161-63)。火皿底部と軸の継ぎ目、および軸孔の直径に関してはロビンソン独自の基準であるが、サラチハネや他の遺跡における遺物においても当てはまり、この基準は有効であると考えられる。

そしてシンプソンは胎土色、化粧土の有無、光沢の有無、軸孔の直径、火皿の形状、火皿と軸の装飾の6つを基準とし、3時期に大別している (Simpson 2002: 160-66)。この基準のうち、光沢に関しては前述したとおりであるが、火皿と軸の装飾は、数多くの種類が存在しており、時期的な変遷を明確に述べるのは難しい。本稿の目的は、CP-1の年代を明らかにすることであるため、この基準は除外する。

以上より、1) 胎土色、2) 化粧土の有無、3) 火皿底部と軸との継ぎ目、4) 軸孔の直径、5) スタンプ文様の有無、6) 火皿の形状、の6つを本稿の編年基準とする⁴⁾。そして、それらの基準における画期によって、以下の6時期に区分することができる (図3)。

3. 時期区分

以下は、各時期区分の概略である。

I期 (17世紀前半)

この時期のものと特定可能な遺物はごく僅かである。これは、1633年から1648年まで布かれていた禁煙令を反映していると考えられている (Hayes 1980: 4)。灰色系の胎土で、軸が長い。これは、オスマン朝に喫煙文化をもたらした、イギリスのクレイパイプを模したものと考えられている (Robinson 1983: 266)。

II期 (17世紀後半)

禁煙令が解かれ、クレイパイプによる喫煙が広がり始める時期である。胎土は灰色系で、火皿の形状は丸い。またこの時期に、クレイパイプ・柄・吸口の3つに分かれる、オスマン朝の喫煙方法が確立したとされている (Robinson 1985: 153)。

表1 オスマン朝のクレイパイプに関する主な編年研究

研究者	刊行年	分析資料
Hayes, J. W.	1980	イスタンブール・サラチハネ (Saraçhane) /トルコ
Robinson, R. C. W.	1983	アテネ・ケラメイコス (Kerameikos) /ギリシア
Robinson, R. C. W.	1985	コリントおよびアテネ・アゴラ /ギリシア
Hayes, J. W.	1992	イスタンブール・サラチハネ /トルコ
Simpson, St J.	2002	テル・イエズレエル (Tell Jezreel) /イスラエル

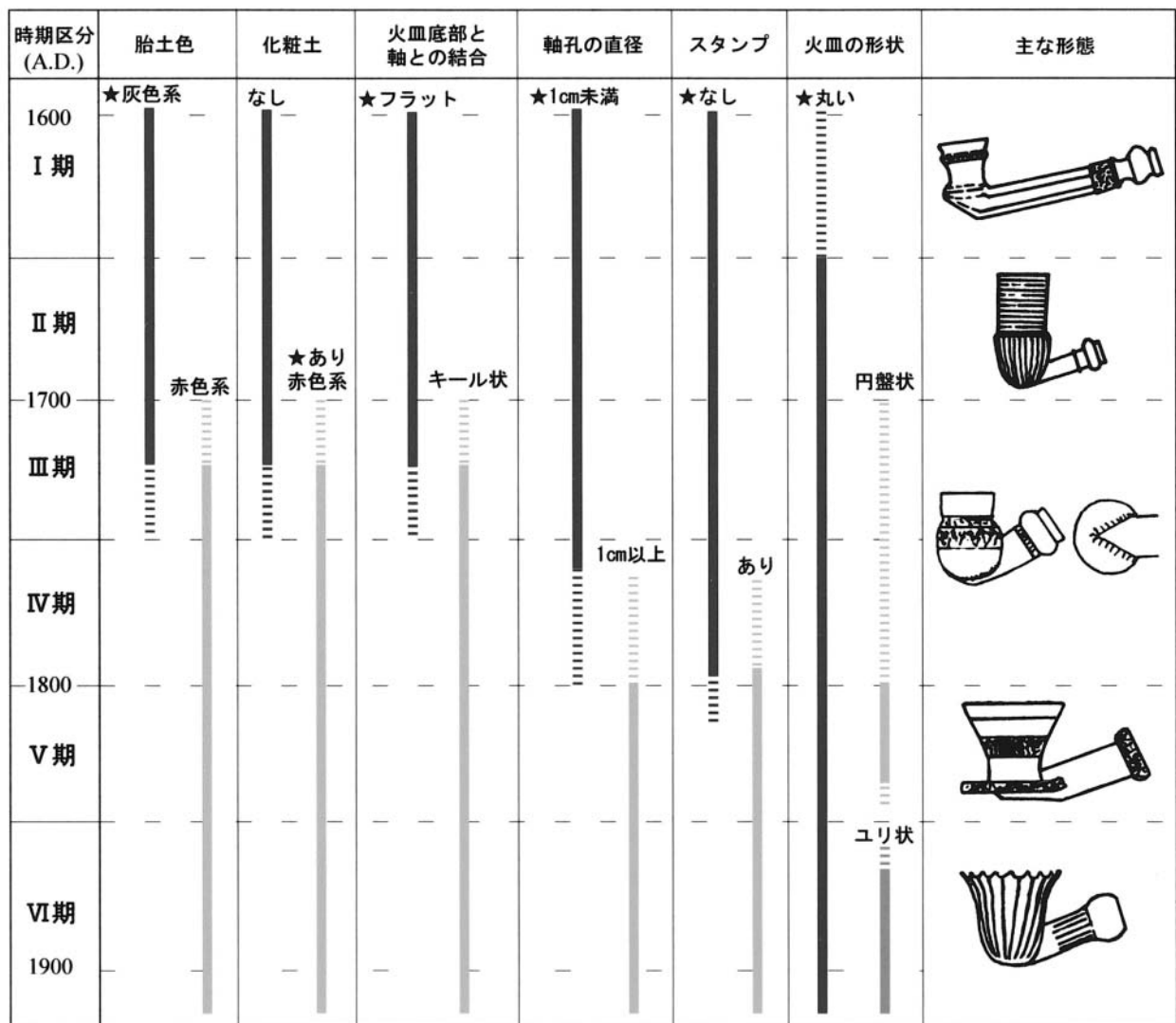


図3 クレイパイプの時期区分と編年基準 (★: CP-1 の特徴)
 (編年表部分は Hayes 1980, 1992; Robinson 1983, 1985; Simpson 2002 を基に作成、
 図版部分は Hayes 1980: 6, Fig. 1 を基に作成、縮尺不同)

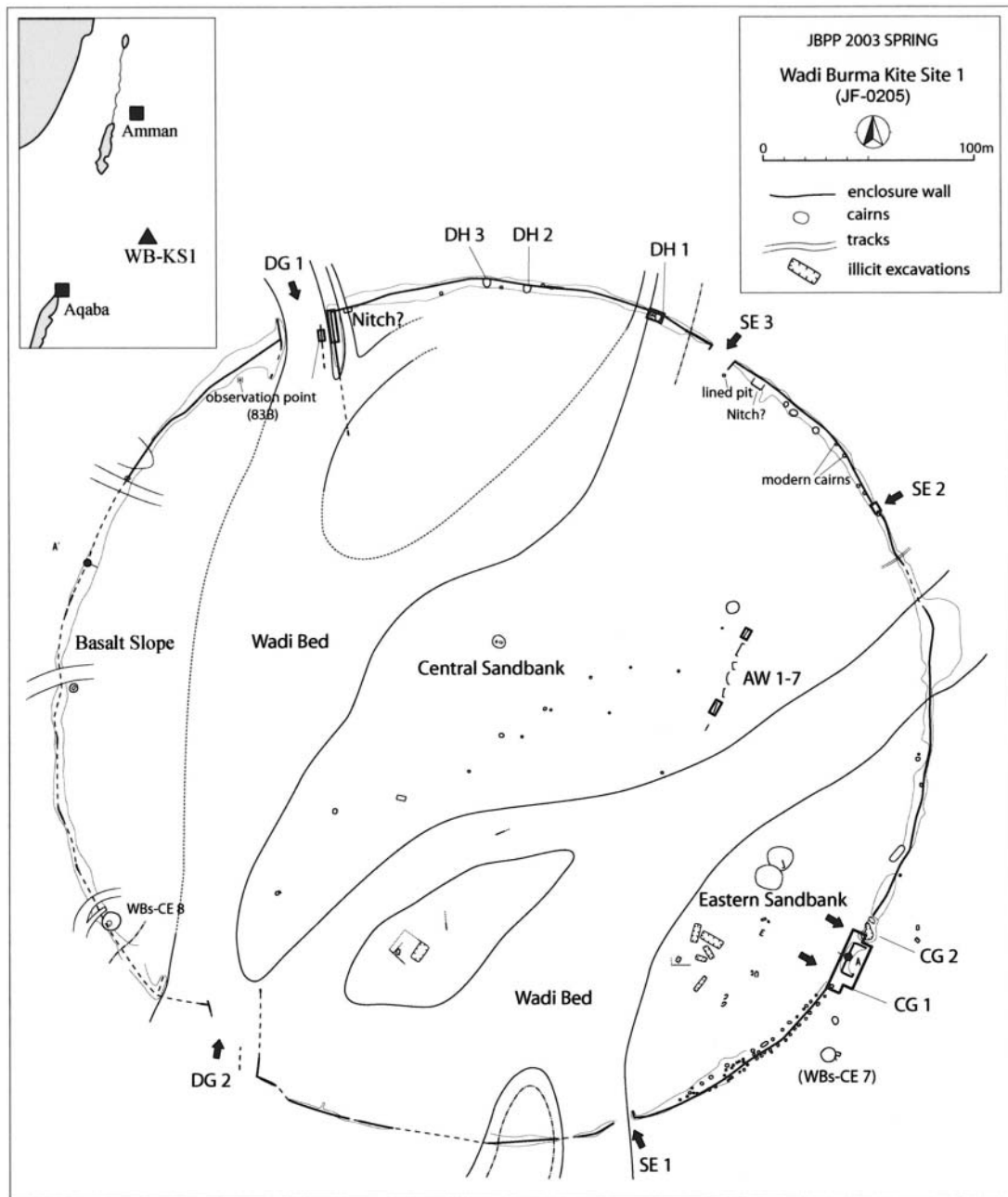


図4 WB-KS1 平面図 (Fujii 2004 を基に作成)

Ⅲ期 (18世紀前半)

Ⅱ期からⅣ期への移行期である。胎土は灰色系から赤色系のものが用いられるようになり、赤色系の化粧土が使われ始め、火皿の底部と軸の結合がキール状になるものがみられるようになる。また、この時期から火皿が円盤状のものがみられるようになる。

Ⅳ期 (18世紀後半)

この時期以降、大半のクレイパイプが、赤色系の胎土で、化粧土が施され、火皿の底部と軸の結合はキール状になる。また、軸孔の直径が1cmを超えるものや、製作者(あるいは製作地)のスタンプ文様が施されるものが現れ始める。

Ⅴ期 (19世紀前半)

火皿の形状が円盤状のものが主な形態となる。この背景には、フランスがこのタイプの火皿を輸出し始めたことが挙げられている (Robinson 1983: 271)。またこの時期以降、軸穴の直径は1 cm 以上になり、大多数のクレイパイプにスタンプ文様が施されるようになる。

Ⅵ期 (19世紀後半～20世紀前半)

最も出土数が多い時期であり、火皿がユリ状のものが主な形態となる。なお、第一次大戦前後の紙タバコの増加と、ブライアーパイプの導入により、1920年代に大半のクレイパイプの生産が終わる (Robinson 1985: 152)。

4. CP-1の年代

では、CP-1はこの6つの時期区分のうち、どの時期にあてはまるであろうか。

CP-1の胎土が暗灰色であり、かつ赤色の化粧土が施されていることから、まずⅢ期ではないかと考えられる。ただし、極めて希ではあるが、例外的に19世紀のもので、胎土が灰色系であり、赤色系の化粧土が施されているものも存在するため、補足としてその他の基準と比較してみる。すると、残る4つの基準からもⅢ期であることが確認できる。よって、CP-1の年代は、Ⅲ期、つまり18世紀前半であると考えられる。

遺構との対応

前章におけるCP-1の年代推定を踏まえて、遺構との関連について試論を提示したい。

CP-1はワディ・ブルマの河床・砂州上に広がる追込み猟の固定施設である、WB-KS1(図4)より採集されている。WB-KS1からは遺構全体の年代を特定する原位置遺物は出土していないが、採集された遺物に8世紀頃の赤色彩文土器や灰黒色無文土器が多いことなどから、遺構の構築年代はウマイヤ朝期と考えられている(藤井2004:25)。ただし、発掘調査によって2つの層位が確認されており、さらに一部の壁に積み直された痕跡がみられることから、ウマイヤ朝より後の時代に、この遺構が再利用されたと考えられている(Fujii2004)。なお、この再利用時期については、クレイパイプや蹄鉄が採集されていることから、オスマン朝期の可能性が示唆されている(Fujii2004;藤井2004:25)。

しかし、オスマン朝によるヨルダン支配は非常に長期間(1516~1918年)であり、WB-KS1の再利用時期が具体的にいつ頃かということについては、明らかにされていない。そこで注目されるのが、本資料である。仮にこの遺物がWB-KS1の再利用時期を代表しているとすれば、それは18世紀前半であると仮定し得るであろう。

おわりに

これまでのオスマン朝におけるクレイパイプに関する編年研究に基づき、WB-KS1にて採集されたCP-1の年代の考察を行った。その結果、CP-1は本稿の時期区分におけるⅢ期、つまり18世紀前半の形態的特徴をもつことが判明した。そしてWB-KS1の再利用時期についても、18世紀前半頃、つまりオスマン朝支配の中盤という見通しを得ることができた。

クレイパイプは比較的最近の遺物であり、出土する層位はかく乱を受けやすく、表面採集されることも多い。そのため、層位からの年代推定が困難で、扱いが難しい遺物で

ある。しかし、かつてオスマン帝国はタバコの本産地であるとの誤解を与えたほどタバコの生産、および喫煙が盛んであった(濱野1933:99)。故に、この帝国の歴史を明らかにする上で、喫煙具であるクレイパイプの研究は不可欠であり、今後も注目していくべき遺物ではないだろうか。

本稿を執筆するにあたり、藤井純夫先生にはWB-KS1およびクレイパイプに関連する資料の掲載許可を頂き、さらに多くの貴重なご指導を賜りました。また、武内律志、田中範裕、松井みはる、柳生俊樹の各氏からも、多大なご意見・ご指導を頂きました。そして、足立拓朗氏ならびに査読者の方々からは、数多くの重要なアドバイスを賜りました。末筆ではございますが、記して深く御礼申し上げます。

註

- 1) なお発掘調査において、もう1点のクレイパイプ(CP-2)が表面採集されている(Fujii2004;藤井2004:25)(図1)。しかし、CP-2は破片のため部位の特定が困難であり、クレイパイプではない可能性も考えられることから、本稿の対象からは除外した。
- 2) 1604年にブルガリアのソフィア(Sofia)において、パイプ製作者のギルドが設立されている(Robinson1983:265)。他に文献に記されている製作地としては、17世紀においてはトルコのリュレブルガズ(Lüleburgaz)(Robinson1983:268)、19世紀にはイスタンブールのトプハーネ(Tophane)地区(Hayes1980:4)、エジプトのアッシュウト(Assiut)(Robinson1983:268)、南レヴァント地域のエルサレム(Jerusalem)・ジャッファ(Jaffa)・ナザレ(Nazareth)(Simpson2002:169)が挙げられている。なお、製作地に関してロビンソンは、ある程度の大きさの町には、少なくとも1つはクレイパイプの製作工場があったのではないかと推測している(Robinson1983:153)。
- 3) ハイエスは化粧土ではなく、外面の色と表現しているが、ほぼ同じ意味であると考えられるため、本稿では化粧土と同じ基準として取り扱うこととする。
- 4) なお、彼らが主な分析対象とした遺跡は、オスマン帝国領内ではあるがかなり距離が離れている。にもかかわらず、時期的な変遷はほぼ同じであった。よって、これらの編年基準を基にCP-1の年代を考察することは有効であると考えられる。

参考文献

- Fujii, S. 2004 Harra al-Burma K-lines and Wadi Burma Kite Site 1 : A Preliminary Report of the 2003 Spring Season of the Jafr Basin Prehistoric Project, Phase 2. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 48 (in print).
- Hayes, J. W. 1980 Turkish Clay Pipes: A Provisional Typology. In P. Davey (ed.), *The Archaeology of the Clay Pipe* 4. BAR Int. Series 92: 3-10. Oxford : BAR.
- Hayes, J. W. 1992 *Excavations at Saraçhane in Istanbul 2: The pottery*. Oxford : Princeton University Press.
- Robinson, R. C. W. 1983 Clay Tobacco Pipes from the Kerameikos. *Athenische Mitteilungen* 98: 265-85, pls. 52-56.
- Robinson, R. C. W. 1985 Tobacco Pipes of Corinth and of the Athenian Agora. *Hesperia* 54: 149-203, pls. 33-64.
- Simpson, St J. 2002 Ottoman Pipes from Zir'in (Tell Jezreel). *Levant* 34: 159-72.
- 曾我重郎 1933 『東西喫煙史』雄山閣。

濱野修訳 1933 コンテ・コルチ著『煙草の歴史』建設社。
藤井純夫 2004 「ヒツジ遊牧の成立と展開：ヨルダン、ジャフル盆

地の総合調査（2003年度）」日本西アジア考古学会編『第11回
西アジア発掘調査報告会報告集』23-32頁 日本西アジア考古学会。

廣田典之
金沢大学大学院生
Noriyuki HIROTA
Kanazawa University